

在校生、卒業生からのメッセージ

日本で初の、医療福祉ジャーナリズム大学院／講師はもちろん先輩や同期も、多士済々

自分で名乗ればその日からジャーナリスト？これでは、これからの時代やっていけないのではと一念発起、医療福祉ジャーナリズムを学べる大学院に挑戦しました。入ってみると先輩や同期は、雑誌の編集者、写真家、行政関係、医療関係者…多士済々です。

医療福祉専門の講義で新鮮な知識を得、多彩なジャーナリストの講師から“インディペンデントなジャーナリストとしての覚悟”を学ぶ日々。これまで温めていた企画を形にするのも楽しみです。

(修士1年在学中・フリーランスジャーナリスト 村上紀美子さん)

百戦錬磨、経験豊富な教授陣にコミュニケーション力を鍛えられる

IT や TV の制作が仕事の私は、医療もジャーナリズムも素人でした。だから最初は不安でしたが今はとても充実しています。なぜならここで学べるものは「コミュニケーション力」だからです。

百戦錬磨の記者であった教授陣による講義はとてもユニークで、新鮮な驚きの連続。ゼミ生は年齢も職種もさまざまですが、第一線で活躍されている方との時間は刺激とチャンスに溢れています。

(修士1年在学中・株式会社インターフォース プロデューサー 今田好敬さん)

本音で語り合えるあたたかい貴重な時間

日々、医療福祉の現場で仕事をしている私にとって大学院は、ここでなければ直接お会いすることはおそらく不可能な教授やゲスト講師が毎回来てくださり、生の声をお聞きし、本音で話ができる何よりも素晴らしい時間です。

仕事をしながら大学院へ行くなど、時間的に不可能だと思っていましたが、先生方の人間性からなののでしょうか？看護の世界しか知らない私には、こんなにもあたたかい授業があったのだと、感動さえ覚えます。欠席したくない!! もったいない!!そんな気持ちで勉強をしています。

(修士1年 在学中・開業看護師を育てる会 理事長 菅原由美さん)

医療福祉ジャーナリズム分野で学んでよかったこと

大学院入学したのは、自己の思考力や判断力や大学教師としての指導力などを向上させるためです。現実には仕事で判断に迷うことがあります。

この分野は今問題になっている社会問題や医療福祉関係の話題を取り上げ、考えさせてくれます。情報が早く入り、とても参考になります。知識が広がり楽しいです。

ゆきさん(と呼ばせていただくことになっている大熊由紀子先生)の魔法のペンに驚いて

います。私も文章が上手に書けるようになりたいと思います。

(修士1年 在学中(福岡キャンパス)・介護福祉士養成大学 教員・篠沢登代子さん)

さまざまな媒体の特色を知り伝える方法論から度胸までを学んだ

興味あるテーマを追えるって気持ちいい。医療福祉ジャーナリズム分野での日々を総括すると、このひと言に尽きます。企画が通るまで、そして追いかける中でも苦労はありますが、新聞やTV、雑誌ジャーナリズムの世界で活躍なさっている教授、ゲストの先生方、TV制作のプロの方々からのご指導をいただき、どう伝えていけばいいのかを学びました。ジャーナリズムって何?という状態だった私はここで、たくさんの栄養、水と日光をもらいました。

他分野もふくめ、地道に真剣に、さまざまなテーマで研究に取り組む仲間との出会いも大切な宝物です。

(修士2年 在学中・ライター・フォトグラファー 神保康子さん)

現場は目からうろこ!

自立して生きていくために大事なこと、それは「人としての尊厳」です。病気、事故、老いなどで、人はからだが不自由になっていきます。でも、ここが自由な人は、輝いています。医療福祉ジャーナリズムは、そんなゲストとの出会いが魅力です。「人としての尊厳」を真摯に学ぶ場は、社会に生きているパッションを与えてくれます!

(修士2年 在学中・医療コミュニケーション研究所・高田順江さん)

医療福祉ジャーナリズム分野との出会いが私にもたらしたもの

大学院への入学は、未知の世界に飛び込むような感覚でした。体に染み込んだ“今までの環境への慣れ”“心と脳の固さ”を拭い去るためには、私にとって、最適な環境であったと思います。

学びの大きさの背景には、出会いの多さが比例しています。同じ業界の人間関係の中とは明らかに異なる視点と触れ合うことで、視野開拓のための大きな力を得ました。

やっと“ジャーナリズム”の入口にたどりついた気持ちですが、ここに立てた感動と感謝を感じています。

(修士2年 在学中-福岡キャンパス-SEO福祉サービス評価機構
臨床介護研究研修センター所長 奥住ひろよさん)

深くたのしい学びのなかで見つけた人生のあたらしい設計図

私は47歳で、医療も福祉もまったく分からない状態で入学しました。今、最も注目されている先駆的な朝日・読売新聞のジャーナリストの教授、TV報道のスーパーキャスターの教授から直接ご指導いただき、この歳でようやく自分を取り巻く環境へ「目が見え、耳が聞こえ始めた!」という感動を味わっています。同級生も社会人、忌憚なく真摯に人生を語りあ

い、励まし合って学ぶ日々は人生の宝です。「こんなに深く楽しい学びがあったのか!」と知り、これからの人生の設計図が、全く違って見えてきています。

(修士2年 株式会社綺麗塾 代表取締役 シニア産業カウンセラー池田朝子さん)

TV番組をプロのサポートで企画制作。放送されるのは感無量の経験

新聞、TV、雑誌、書籍など、多岐にわたる講師陣を揃えたゼミは、少人数制なので、意見交換も活発で刺激的でした。TVの授業では企画段階から自分でプレゼンし、細やかで密なプロのサポートを受けながら、番組を制作していきます。実際に放送されるのは、感無量の経験です。

毎週、医療界の先駆者や、著名な実績あるゲストの講義もあり、さまざまな経歴の大学院生が集まるため、多角的な視野が養えるのも魅力です。

(2009年3月修士課程修了・産業保健師/助産師/ライター ミツ堀祥子さん)

医療福祉に専門家以外の参画、意見は不可欠。自治体ジェネラリストとして大学院へ

自治体のジェネラリストとして、福祉から地下鉄建設、大学運営など、幅広い仕事をしてきました。自分の仕事人生を振り返った時、その柱として福祉・医療があることを改めて思い、大学院を希望しました。

医療や福祉の現場、また専門家教育は、専門家の分野として語られることが多いのですが、経営や運営の側、所謂「事務方」アドミニストレーションの参画や患者の意見は不可欠だと思っていました。

実践的な講義ではそのような現場の方々の話をたくさん聞くことができ、自分と異なる視点や状況に思いを馳せることの意味を教わりました。またTVジャーナリズムの現場を体験させていただいたことは、得難い経験となりました。卒業をしてもTV制作企画など、参加させていただきたい、と思っています。

長くお付き合いさせていただける大学院、社会人にとってありがたい存在です。

(2009年3月修士課程修了・財団法人埼玉県国際交流協会 理事長 加藤ひとみさん)